

明倫館だより

第42号
平成16年8月1日発行
人井上晴雄
法人南豫賀学会
財団法人大明倫館
〒184-8586
小金井市中町4-18-26
TEL 042-383-9835(代)

難題の
解れぬままに
秋近し
中浦 勇
〔獅子唐句会〕
酒井 けい子

平成16年度主要行事予定

平成16年

- 4月 1日 16年度新入寮生16人入寮
- 10日 寮室壁紙・ドア鍵・サッシ棒補修・学生用風呂シャワー取替
- 18日 新入寮生学生歓迎会開催・自治委員会開催
- 24日 第2回隣地西方氏宅排水口工事実施
- 25日 16年度第1回常務理事会開催・新入寮生歓迎会開催
- 5月27日 監査役会開催
- 6月 5日 平成16年度第1回定例理事会開催
- 7月 2日 第2回常務理事会開催
- 7日 定期消防点検
- 25日 中庭池清掃(自治会)
- 29日 定期浄水槽点検
- 8月 9日 夏季休暇開始
- 21日 夏季休暇終了
- 25日 愛媛県4寮懇親会開催
- 10月 8日 17年度入寮説明会
- 9日 保護者懇親会
- 平成17年度奨学生選考
- 11月23日 第3回常務理事会
- 16年度寮祭
- 12月27日 冬季休暇開始

平成17年

- 1月 8日 冬期休暇終了
- 2月11日 第1次入寮願書締切予定
- 3月11日 第2次入寮願書締切予定
- 19日 入寮面接選考試験予定(宇和島市)



友岡 清志(専修大学・商学部、三間町)

谷 雄介(早稲田大学・政治経済学部、日吉村)
一 趣味は俳句です。南豫明倫館の中で、やりたいことがたくさんあります。頑張ります。

二 先の見えない現代という時代は、可能性のある時代であると攻撃的に考えたい。私は政治家になりたい。

久保田 圭(東京理科大学・理学部、ラケット系のスポーツ得意です。大学でも体を動かす部活に入ろうと思っています)。

二 化学に興味があり、化学科に入りました。将来は化学が活かせる職に就きたいと思っています。

二 宮 泰明(専修大学・経営学部、西予市)
一 八幡浜高校出身です。東京には、学業はもちらん社会勉強をするためにやつてきました。よろしくお願いします。

二 私は、公務員になりたいと考えています。私の学校では資格取得にも力を入れているので学校をうまく利用しながら頑張つていこうと思います。

赤松 洋多(中央大学・総合政策学部、広見町)
一 特に頭がいいというわけではないので、これから四年間精進したいです。

二 宮 泰明(専修大学・経営学部、西予市)
一 やつとこさ寮生活になれてきた気がします。パソコンが好きです。あとは剣道や書道も少々。

二 公認会計士になって将来は独立し、ビジネスを創る。そして地元の活性化に努める。これは目標ではなく条件である。

古谷 和崇(専修大学・商学部、宇和島市)
一 やつとこさ寮生活になれてきた気がします。パソコンが好きです。あとは剣道や書道も少々。

二 今は迷っていますがこれから大学生活を送っています。将来後悔しないように今出来ることはすべて行っていきたいです。

三 成本 純(中央大学・法学部、西予市)
一 趣味は読書と将棋です。方言の抜けない田舎者ですが、何卒よろしくお願いします。

二 会計士になろうと考えています。在学中に資格を取得できるよう頑張ろうと思っています。

一 今年度から寮にお世話になります。体を動かしてください。よろしくおねがいします。

二 今は迷っていますがこれから大学生活を送っています。将来後悔しないように今出来ることはすべて行っていきたいです。

三 成本 純(中央大学・法学部、西予市)
一 今年度から寮にお世話になります。体を動かしてください。よろしくおねがいします。

二 今は迷っていますがこれから大学生活を送っています。将来後悔しないように今出来ることはすべて行っていきたいです。

谷脇 憲太郎(東京外国語大学・外国語学部、松山市)
一 松山東高出身の谷脇です。部活は吹奏楽とギター研究部を兼部していました。大学では主にウルドゥー語とドイツ語の習得を目指します。

二 大学の四年間で日本語、英語を除いて3ヵ国語以上を習得し、日本とインド亜大陸ヨーロッパの音楽交流に貢献しようとを考えています。

三 濱田 達明(東京経済大学・コミュニケーション学部、御荘町)
一 戸籍上は東京で生まれたのですが、実家は愛媛県宇和島市で育ちました。そこで育ったので、東京でいるよりも宇和島の方が自然な感じです。

二 夢を売るような仕事がしたいです。

寮生としての自覚を持つて

自治委員長 竹田 重仁

東京農工大(三年)

平成16年度		前期自治委員会	
委員長	副委員長	西	東
竹田 重仁(3年)	竹崎 韶(3年)	竹田 重仁(3年)	竹崎 韶(3年)
竹崎 韶(3年)	弘幸(3年)	竹崎 韶(3年)	弘幸(3年)
弘幸(3年)	弘龍(2年)	弘幸(3年)	弘龍(2年)
弘龍(2年)	光平(2年)	弘幸(3年)	光平(2年)
光平(2年)	孝規(2年)	弘幸(3年)	孝規(2年)
孝規(2年)	幸平(2年)	弘幸(3年)	幸平(2年)
幸平(2年)	徹(2年)	弘幸(3年)	徹(2年)
徹(2年)	宏樹(2年)	弘幸(3年)	宏樹(2年)
宏樹(2年)	永賢(2年)	弘幸(3年)	永賢(2年)
永賢(2年)			

一 私はマイペースな性格で他から見るとイライラするくらいゆっくりとしているのでそこへんは許していただけるとありがたいです。あとまだ寮生活のことでわからないことがあります。指導の方よろしくお願ひします。

二 私の家の神社なので私は神職の資格を取り家を継ごうと思っています。國學院大學を選んだ理由としては、日本の文化や宗教というものに興味を持つていたからです。在学中にアメリカなど海外へ行つて世界のいろいろな文化についても学びたいと思っています。

三 濱田 幸祐(青山学院大学・法学部、御荘町)
一 高校の時は文化系の部活(書道)でしたが、どちらかといふと体育系です。結構几帳面です。

二 将来はロースクールか就職を考えています。就職ならマスコミ関係が希望です。

三 濱田 達明(東京経済大学・コミュニケーション学部、御荘町)
一 たくさんの方達をつくりたいと思います。東京でいろいろな物の見方、考え方を学びたいです。楽しみ

みなさんのおかげで、自治委員長を努めさせていただることになり、うれしく思います。最近の寮生生活において、寮生のマナーが悪いとのことをよく耳にします。僕の目標は寮生の意識改革にあります。寮で生活する以上、身勝手な行動は許されません。寮生として正しい行動がとれるように、時には厳しくしていきます。あたり前のことですが、あたま前にできる相手のことを思いやれる人格を形成し、住み心地の良い寮にしていきたいと思います。

財団法人南豫奨学会

「奨学金支援会」だより

ごあいさつ

慶應義塾大学
防衛大学校
(南豫奨学会理事・奨学委員長・同支援会副会長)
名譽教授 松本 三郎

六年度申込締切り迫る!

現在申込者数 二六名
同 金額 二四九万五千円
目標額三百万円まであと少し!

多数の皆様からのご支援をいただき、「奨学金支援会」の申込みは左記の通り順調に増加しています。さつそく一七年度からの奨学金として活用すべく準備をすすめています。

六年度分の締切りは、二六年二月三日です。目標額まであと少し。すでにお申込みをいたしました方々に感謝いたしますとともに、まだお申込みを頂いていない方々には、あらためてご支援をお願い申しあげます。

財団法人南豫奨学会理事長 同 様
伊達 宗禮
郵便振込番号 ○一五〇一一二一九六五三
名義 「南豫奨学会奨学金支援会」
銀行口座 伊予銀行新宿支店普通預金口座
一一六〇六三九
委員長 松本 三郎

支援会申込並びに入金状況 (平成16年7月31日現在)

	申込者数(人)	払込金額(円)
理事・監事他	15	430,000
評議員	30	580,000
OB	58	680,000
現父兄	25	350,000
一般	28	295,000
法人	3	150,000
市町村	1	10,000
合計	161	2,495,000

*理事・評議員にはOBを含む

修学できた感激

木下 博民
(南豫奨学会顧問・選奨金支援会会員代表)

伊達奨学会の想い出

一

宇和島東高一期生の松本です。東大教養学部を卒業、大学院を慶應義塾大学で学んだのち、長く大学で教育研究に従事し、また常任理事として学校行政に携わりました。その後約七年間防衛大학교の校長を勤め、四年前に現役を退任、現在は天赦園の名の由来「残転天の赦すところ、樂しまずして是を如何せん」の心境の毎日です。

宇和島での中学から高校にかけての親友福井安春君が、復興明倫館の一期生であり、南豫奨学会の常務理事をしていた縁で、先般伊達理事長よりの御委嘱を受け、南予奨学会の奨学委員長として、また奨学金支援会の副会長として、当会のお手伝いをするようになりました。慶應

時代に学生部長として、また全国私立大学学生部会議の委員長として、奨学金問題を扱ってきた経験を生かして、南予奨学会の奨学事業の充実と持続可能な奨学支援会の支援体制作りに努力したいと思います。

それにもしても、ふるさと宇和島を離れて五十年忘れることはないものの遠くなっていた故郷が、こういう形で再び近い存在になるとは、鮑が再びふるさとの川に帰るごとく、人も現役を退く頃になると、再びふるさとの思いが強くなるのは不思議なものです。故郷のため、後輩のため、何かお役に立ちたいと考えるのは、人間としてのきわめて素朴な本性(愛情)であり、また先輩としての努力のためです。

二十一世紀の世界の情勢は、きわめて混沌としており、将来を予測することの非常に難しい時代に入っています。こうした時代を日本が賢明に生き発展していくためには、いかなる事態にも柔軟に対応し、危機を乗り切ることの出来る若い優秀な人材を育成しておくことが一番肝要です。

そのためにも、明治以来南予出身の俊英育成のため大きな役割を果してきた伊達奨学会と、その伝統を受け継ぐ南予奨学会の維持発展のために、南予に關係ある心ある有志の方々のご協力ご支援を心からお願いする次第です。

J.R.の「ジパング俱楽部」の今8月号の特集「南予町の色、町の薫り」を懐かしく見ながら、「今まで宇和島に帰ろうかな」と、旧友の顔やふるさとの町並みを思い浮かべつつ、新任のご挨拶を申し上げます。

五十五年前昭和二十三年三月三十日の学制改革によって、市立宇和島商業学校と県立宇和島商工学校とが「県立宇和島商業高等学校」に変わった。一方、県立宇和島中学校は「県立宇和島第一高等学校」となった。

その一年半のち、昭和十四年九月一日、再び高等学校の改編があり、「県立宇和島商業高等学校」と県立宇和島第二高等学校とは、新たに「県立宇和島東高等学校」として統合、前者は同校商業科、後者は同校普通科となつた。

宇和島に市立(はじめは町立)商業学校ができるところ、八幡浜と松山にも県立商業学校が折り重なるようにしてできた。なぜ宇和島は県立ではなく、市立の商業学校であったのか。いくつか、理由が考えられる。

まず、商業教育ほど、個性を意識しなければならない教育はない。全国画の教育では、地域商業に貢献する真のキメ細かな商業教育は生まれない。百余年前の宇和島の町では、商人はじめ有力者はそう思つて、自らの商業学校を創つた。

さらに、実業教育のうち商業ほど対人中心の教育はない。農業、水産、工業などには、すべてはじめにモノがある。商業は、最初にも、最後にも、人である。

対人教育の基本は指導者、すなわち校長の人柄に左右される教育である。国が定めた教科書を単になぞただけでは、人は見えてこない。長い時間を開けて、地域商業を踏まえた、特色ある学校環境を創り上げる。そのなかなら、対人教育が生まれる。

昭和のはじめ、宇和島市長の山村豊次郎は、このところ、生家隣の私塾「静古園(塾主は漢学者末広靜)」で学んだ松浦鎮次郎が文部次官になつてゐたので、かれと談合して、丸島清という最適任者に礼を尽くして、招聘(しようへい)した。たまたま丸島は、郷土の偉人、男爵法学博士穂積陳重の長男重遠と、高東大の同期生であつた。丸島校長の学識と思想に、宇和島市民は大いに敬意を払つた。

わたしの書かんとする宇和島商業学校私史は、丸島校長の信念一路を中心に構成した。例えば、丸島校長は自ら「修身(儒教的道徳教育)」を担当した。現在なら「社会科」の倫理とでも言おうか。そのはじめに、丸島校長は、全校生徒の家庭事情を熟知して対応した。生徒に「おい、君」なんぞ

とは絶対に言わず、必ず「××君」と名前で呼んだ。武義先生が、わざわざ訪ねて来られ、両親を説得した。父親はしぶしぶ尋ね、年のつもりで承知した。商業三年生になったとき、約束通り就職しろと言われた。一番困るのはわたしだが、周囲でもテニスが得意だったので、ときに若い先生や生徒とプレーもした。師弟の信頼感は、このような些細なことからはじまると思つた。

商業学校の生徒は、卒業と同時にほとんどが就職する。校長は毎年、自ら会社訪問を欠かさず、就職する大会社が徐々に増えつた。訪問時には、中学校にあるで商業科の先生を頼まれて、よほどで社会人になつたOBとも顔を合わせ、よく仕事の様子などを聞いた。

あるとき、満州に就職した青年が帰國した。丸島は、隣の尋常高等小学校(いまいうならば、中学校にある)で商業科の先生を頼まれて、進んで社会人になつたOBとも顔を合わせ、よく仕事の様子などを聞いた。

就職する。校長は毎年、自ら会社訪問を欠かさず、観察したり、部活中の生徒に声をかけたりした。ある校長さんの学校の生徒なら」と無条件に採用する大会社が徐々に増えつた。訪問時には、中学校にあるで商業科の先生を頼まれて、よく仕事の様子などを聞いた。

商业学校の生徒は、卒業と同時にほとんどが就職する。校長は毎年、自ら会社訪問を欠かさず、就職する大会社が徐々に増えつた。訪問時には、中学校にあるで商業科の先生を頼まれて、よく仕事の様子などを聞いた。

ある校長さんは、学校の生徒なら」と無条件に採用する大会社が徐々に増えつた。訪問時には、中学校にあるで商業科の先生を頼まれて、よく仕事の様子などを聞いた。

編集後記

わたしは市立宇和島商業学校に大きな誇りを持つている。振り返ると、もつとも充実した(わたくしはそう思つてゐる)丸島校長時代の時期、昭和十年四月から昭和十五年二月の五年間、わたしはそこで学習した。

南豫明倫館から拙稿を頼まれたのは、市立宇和島商業学校のことではなく、この学校を卒業できるよう、支援してもらつた伊達奨学会について、求められたのである。少ない紙数でこれをまとめなければならぬ。

家庭は、わたしを中等学校に通わせるほど裕福ではなかつた。尋常高等小学校(一年制)でも終えれば、何處かの店に小僧か給仕にやろう、と両親は考えていたらしい。受験だけでもねだつて、島校長の学識と思想に、宇和島市民は大いに敬意を払つた。

わたしの書かんとする宇和島商業学校私史は、丸島校長の信念一路を中心に構成した。例えば、丸島校長は自ら「修身(儒教的道徳教育)」を担当した。現在なら「社会科」の倫理とでも言おうか。そのはじめに、丸島校長は、全校生徒の家庭事情を熟知して対応した。生徒に「おい、君」なんぞ

とは絶対に言わず、必ず「××君」と名前で呼んだ。武義先生が、わざわざ訪ねて来られ、両親を説得した。父親はしぶしぶ尋ね、年のつもりで承知した。商業三年生になったとき、約束通り就職しろと言われた。一番困るのはわたしだが、周囲でもテニスが得意だったので、ときに若い先生や生徒とプレーもした。師弟の信頼感は、このような些細なことからはじまると思つた。

商業学校の生徒は、卒業と同時にほとんどが就職する。校長は毎年、自ら会社訪問を欠かさず、就職する大会社が徐々に増えつた。訪問時には、中学校にあるで商業科の先生を頼まれて、よく仕事の様子などを聞いた。

ある校長さんは、学校の生徒なら」と無条件に採用する大会社が徐々に増えつた。訪問時には、中学校にあるで商業科の先生を頼まれて、よく仕事の様子などを聞いた。